

遠い友への書簡

ウクライナ情勢・シベリア民族学・言語と民族と地理の問い

渡邊日日

わたなべ・ひび

お久しぶりです。元気になってますでしょうか。こちらは、いろいろありましたが、そのことはまた別に。

ネットで公表した拙文¹⁾、読んでくれたのですね。ありがとうございます。拙文に関心をもってわざわざお手紙を送っていただいたわけなので——そんな希有な人、まずいません！——長くなりますが感謝の気持ちを伝えるべく、思うところを貴方に書き送ろうと思っています。

今回の戦争は、貴方もお感じになっている通り、多くの問いを投げかけています。人文学全体にとって、戦後日本の思想と体制にとって、あるいは芸術表現にとってなど、いろいろな面で難題を突きつけています。どこから手を付けたらいいのか分からないくらいですが、私の専門は文化人類学とシベリア民族学ですので、まずはこれらの観点、特に後者からということになるでしょう。

ちょっと長くなりそうですので、お手元に何か飲み物でも用意してくださいと幸いです。



2月24日に戦争が始まり、一週間もすると、奇妙な感じを覚えました。

戦争開始直後、貴方もそうだったのではと思うのですが、私はインターネットのニュースに釘付けで、早くも、戦死者のニュースに接しました。ウクライナの軍人・市民の多くが犠牲になっていますが、この手紙ではロシア軍の方を見たいと思っています。捕虜でも死体²⁾でも、いわゆるアジア系の、

自分がフィールドワークで見知った顔立ちがありました。ロシア兵のなかにブリヤート人やサハ人がいてもなんらおかしくないのですが、ロシアにおけるその民族比率の低さと比べると、目立ったのです。なお、ここでは「人」と記すときは民族を意味し（「ロシア人」とある場合ロシア民族を指します）、それ以外の表記は民族帰属については関係ないものとします（「ロシア兵」にはタタール人の兵士もいる、というように）。ややこしいですが、この区別が重要なのです。話を戻すと——ウクライナ市民にロシア兵が捕まって、質問されている動画がアップされていました³⁾。だいたいこんなやりとりが記録されていました。おまえは誰なんだ？、ブリヤート人です、なぜここに来ている？、（前の戦車を）追ってきただけなんです、ブリヤート人の兵隊か、ブリヤーチアに送り返してやるからな、追いかけるべきなのはトナカイだろ（「トナカイ」ではなく「羊」か「牛」と言うべきなのですが…）。また、ウクライナ国防省は、ブチャの虐殺に関与したとして、ロシア軍第64自動車化狙撃独立旅団の名簿リストを公表しました⁴⁾。個人番号・名前・位・生年月日・登録地（どこの軍管区からか）などの情報が掲載されているもので、ダウンロードしてざっと見てみたのですが、大多数がシベリア・極東の出身者でした。

ウクライナでのロシア兵死者のうち、ダゲスタン出身者が一番多く、次にブリヤーチア出身者、三番目にトゥヴァ出身者という情報には貴方も接したことがあるかもしれません。ブリヤーチア首長のアレクセイ・ツィデノフは、3月4日の時点で、ブリヤーチアからの出兵者のうち約1.5%が戦死したと公言しました⁵⁾。同月20日、ブリヤーチア出兵者の死者数は13名に及ぶ可能性があると言われていました⁶⁾。ロシア軍は途中から死者数の公表をしなくなりりましたが、4月6日時点で戦死者のうち93名がダゲスタン住民、52名がブリヤーチア住民というもので⁷⁾（もちろんこの数は公式確認によるもので、実態はそれ以上でしょう）、こうした戦死者の「地域ランキング」はその後ほぼ固定したようです。

戦死者の地域格差については、日本でも報じられたようですので、貴方もご存じかもしれません⁸⁾。もともとはロシア発のソースで、ロシアのジャーナリストがデータを収集し、分析しています。戦死者が出たり遺体が戻ったりすると、たいてい地方自治体の首長が追悼するコメントを出しますので、そういうのを丹念に拾っていくのです。そうしたジャーナリストの一人、もともと（昨年、編集長のドミトリー・ムラートフがノーベル平和賞をとつ